いふ。

（同年八月二十八日『東京朝日新聞』）

いかなる理由によるものか、新築計画は一転して建物借用へと変更し、遂には東京教育博物館の方が湯島へ移転することになる。この辺の経緯は『国立科学博物館百年史』（昭和五十二年同館発行）に記されているが、そこには隠微な事情があったらしく、左記の竹内久一の回顧談にもそれが窺われる。

學校組織の準備が出來て愈々上野の教育博物館の跡へ移る事になつた。尤も此の移る事もまだ秘密で發表せられなかつたが、芳崖先生が教務上の事やら秘密の事やらは、何時でも眞先に聽いて來られたのである。かゝる次第ですから、芳崖氏を始めとして、友信氏正明氏と私とが、まだ盛んに縱覽を許しつゝある教育博物館に出掛て、ひそかに敷地の檢分をやつたのである。これが二十一年の秋の事で、此時になつては會計主任には鳥羽聖敬氏が來られ、また黒川眞頼氏も來られましたが、長沼守敬氏は博物館へ轉任されました。それから愈々移轉の準備が整ふと同時に、折角今迄丹精された芳崖先生が病氣にかゝられ死去された、それが二十一年十一月四日（ママ）で歳は六十一であつて、谷中長安寺に葬られ、臥龍居士と號された、芳崖先生は唯敷地のみを見たばかりで、歿せられたのである。葬式は美術學校の教授としての資格で學校の前を通過したのである。

（「竹内教授の昔物語」『東京美術学校校友会月報』第一巻第九号。明治三十六年五月）

竹内久一らが「ひそかに敷地の検分をやった」のは、博物館との摩擦を懸念したためであろう。なお、竹内がそれを二十一年秋としているのは、前出の新聞記事が示すとおり同年八月には本校の博物館への移転が公表されていたことからみて時期的に遅すぎるようである。

上野選定

本校側は上野移転を強く望んでいた。その理由についてはのちに本校校長となった正木直彦が開校満二十五年記念式典の際に次のように述べている。

本校が位置を上野に卜したといふことに就てもまた一場の御話しがあるのであります。それは前にも申上げた濱尾男爵が本校開校以前に、圖畫取調の用務の爲に歐洲各地へ出張されたときに、伊太利へも行かれたのであつたが、或る日此伊太利羅馬の元のメヂチー家の別業の跡に設けられてある佛國美術學院へ行かれて見るに、其地は市街の中であるが、小高き處で、河に臨み林を控へといふゆうやうに（ママ）、洵に幽邃で風致のある、一頭地を抜いて居る處であつたのに男爵が感ぜられ、成るほど美術學校はかういふ處でなければならないと考へられて、歸朝後此上野の如く、高潔で茂林のある處でなければ、外に美術學校を置く所がないと思はれて、當時の教育博物館を本校としたのであるといふことであります。

（『東京美術学校校友会月報』第十三巻第五号。大正三年十月）

このように、正木は浜尾新がローマの仏国美術学院を見て日本の美術学校もそのように幽邃で風致のある所に設けたいと考えたことが契機となって上野の山が選ばれたと述べており、この話は浜尾も列席していた式典でなされていることから、浜尾に聞いた儘を述べたものと思われるが、選定理由は単に幽邃の地であるだけでなく、そこに広い文部省用地があり、帝国博物館の前身である宮内省図書寮附属博物館があり、またそこが内国勧業博覧会や諸展覧会の開催地であったためでもあろう。特に博物館の近くに美術学校を設けるということは、フェノロサが欧米視察前に執筆した帝国美術博物館設立に関する建白書の草稿において提案しており（『フェノロサ資料I』三一七頁）、彼らの美術行政構想を実現するためにはそれも一つの重要な条件だったのである。

本校の校舎にあてられた東京教育博物館は、もとは東京博物館といい、明治十一年一月に教育博物館と改称、同十八年八月にこの名称となったもので、上野公園の西北隅（西四軒寺跡）一万六千七百四十九坪余りの文部省用地が同館の敷地にあてられていた。敷地内には二百十九坪余りの本館（明治十年建設）のほかに新館（同十六年建設）、東京図書館書庫（同十二年建設。東京図書館は同十八年六月教育博物館に合併）その他があり、敷地の境界には土手が築かれていて、正副二つの門があった。

同館は手島精一が献身的努力をもって運営し来り、教育文化の発展に寄与したが、明治十年代末から縮小化の方向に向かい、同二十二年六月十日に閉館。その後、高等師範学校附属施設となり、同校隣接地の湯島聖堂内に移転し存続した。本校は閉館寸前の同館の建物に移転し、また、用地を東京図書館（同二十二年三月東京教育博物館より分離独立）と分割して引き継いだ。

現在、本学の美術、音楽両学部は東上野から谷中へ通じる道路であたかも区分されているかのようになっているが、東京美術学校開校当時はこの道路は無く、敷地の北東は旧西四軒寺通り（今の本学事務局の裏手にあった道路）まで延びていた。東南は桜橋通り（現在本学と都美術館の間を桜木一丁目方向へと抜ける道路）に接し、その境界には土手が築かれていて、その中間に表門があった。北は護国院前通り（桜木町通り）に接し、裏門が設けられていた。現在の谷中へ抜ける道路はこの表門から裏門あたりへと本校敷地内を通して作られたのである。敷地の西南は護国院境内と動物園敷地とに境を接していた。北の一角は東京図書館敷地が大きく喰い込み、そこには同館の書庫（のちの本校文庫。現在の煉瓦造り二棟）や閲覧室があった。ほかに敷地内には東京学士会院の本館（明治十九年建設。のちの東京美術学校陳列館ないしはラグーザ記念館）その他同院の建物があった。

表門から校庭を真直に行ったところに本館の正面玄関があった。この本館は明治四十四年に全焼したので、現在では二、三種の写真によって概観を知り得るのみだが、建築学者の伊東忠太は次のように書き残している。

舊東京美術學校本館

本建築は明治十二三年の頃教育博物館として造られ、後轉じて

東京美術學校本館として用ゐられしが、明治四十四年焼失した。木造漆喰塗の極めて質素なる伊太利ルネサンス型で、遙かに新橋停車場の型に據る所がある。玄關の手法の如き、如何にその稚気に富めるかを見よ。

（『世界美術全集』第二十九巻。昭和三年。平凡社）

ただし、伊東が明治十二、三年建設としているのは誤りで、正しくは明治九年六月着工、同十年三月落成である。もともとは東京博物館として建設されたもので、明治四十四年の焼失の際に余燼中より拾得された屋根瓦と思しきものには「明治九年東京博物館」の篆書文字が二行に鐫り出されていたという（『東京美術学校校友会月報』第九巻第四号。明治四十四年二月）。

本校が上野に移転したのは明治二十一年十二月十日である。このことは『官報』（同年同月十二日付）に「東京美術學校ハ一昨日十日上野公園内西四軒寺跡へ移轉セリ」と記されており、『文部省第十六年報』（明治二十一年）にもこれと同様の記載がある。しかし、左記の記事からすると、実際の移転作業は十二月十日から翌年一月十日にかけて行われたことが考えられる。

○美術學校の移轉　小石川植物園内に設けありし文部省直轄美術學校は豫て上野公園内に移轉の筈にて先頃より該事務所を同公園教育博物館内に置きしが昨日より同校全体を教育博物館内に移轉せり。

（明治二十二年一月十一日『朝野新聞』）

移転後間もないころの学校の様子を彷彿とさせるものに前出「竹内教授の昔物語」がある。所々に時期が前後したり説明がわかりにくい部分があるが、貴重な証言なので該当箇所を左に掲載する。

それで學校が愈引移りしは十一月である。小石川の方には圖畫取調掛の一棟の外に、彫刻の爲めの一教場が設けられてあつた、現今工藝科の塑造教室がそれである。設計は藤田氏がやられたので、光線の取様もよろしく、石敷で又教員室も設けられたのである。然るに教育博物館はまだ縦覧を許し居る事故、東京美術學校といふ縦看板は今の裏門と、先達て埋めし古井戸の中間の邊りに、二本の棒ぐひを立てゝ掲げたので、即ち今の裏門が當時の美術學校の表門とも何ともそれが唯一の正門であつたのである。此間迄、新館の裏手にながらく閉鎖されし入口の上に、東京美術學校の横額が掛けてあつて、あれが即ち玄關となつて居たのである。此年十二月生徒募集をして、入學試驗は其の月二十四日より始め、新館で試驗したのだが、まだ此の頃にはその邊に、象の骨や、龜の甲や、馬や兎の骨などが並べられてあつたのである。先づ斯様のわけで中々混雜を極めたので、それに教育博物館もはか〴〵しくは引取らず、さうかといふて美術學校の方では緩りと待つて居るわけにもゆかず、つまり美術學校の方では無理に押掛けて教育博物館に割り込んだ様なものである。それで入學試驗は新館の今の塑造科のところで繪畫の試驗をした、今の第一講義室は固よりの儘で學科の試驗は其處で行ふた、今の教員控所即ちあの狹苦しきところ、一時化

學の教室とも佛語の教室ともなりし所は、此時分學士會院の會員の控席であつたのである。それではなほ建物を述べて見まするに、今の體操場は當時にはなくて丁度前に述べたる正門より眞直に、新館の玄關に通路があつて、其れより圖書館の方によれる所に、六間に十二間位の物置があつた、これを先以て彫刻科の教室に充用した、彫刻科の入學試驗は即ち此所で行ふた、其の隣が即ち小石川より引移した（前上の藤田氏の設計せしもの）建物で石彫の教場としたのである。此の彫刻教場としたる物置の一部に食堂をも設けられた、而して其の向側には聊かの建物がある。又四軒寺時代の土藏もあつて、その土藏はなほ教育博物館の方で使用して居たのである。此の土藏の並びにあつた建物を彫金科の教場準備の場所としたのである。サテ入學試驗も首尾よく終りて、翌年二月生徒を入れたのである。新館の入口を入ると僅かに六七疊敷の場所がある、それが當時の會計室でも庶務室でもあつたのである。今の日本畫科四年の教室に東の方に突き出したる、一室が、それが即ち校長室であつたのである、此の校長室の設けられた時代には、その廣場即ち今の四年の教室には、虎や獅子や狼などの骨が陳列されて居つたので、生徒は此の骨を取り圍んで毎日勉强したのである。併しそれは骨の寫生ではなくて狩野派の粉本やら、フエノロサ氏出題の「茶摘み」に「ブッチガヒ」などを、頻りに稽古して居つたのである。それから其の南方の階上の室にも、矢張り教育博物館の陳列品たる骨格類や、剝製の鳥獸類が、多く室の中央、棚の上下に安置せられまたそこには植物園より運ばれた、美術學校所藏の書籍標本類が此の棚ある箱の上に積み置かれて、これが東京美術學校の文庫である。當時の文庫藏品は實に僅少のもののみで、今から見れば誠に笑止の次第である。それは狩野家の粉本類を最として、濱尾氏岡倉氏が歐洲より持歸られし、各國の博物館などの所藏たる、油繪、彫刻、建築などの寫眞である、此の寫眞が現時折々印刷せらるゝ西洋名作集である。教員の食堂は之の文庫の一隅を以てしたので、鼠や狐の前で中食を召上つたので、當今、長光亭の牛の料理を頂戴するとは、稍異つて居つた樣である、彼是と日を送る中に、教育博物館の列品は漸々形付けられて、全く取拂はれてからは、新館の南室は彫刻の教場北室は繪畫の教場となり、事務所は元の館長室に移る、其の隣が校長室、其の隣が文庫となつたのである。さうして此れ等の位置は、此の間建直した小使室より東南へ當る續きのもので昨年迄物置や、大工の工作場などとなつて居つた所である。唯小使室は博物館時代の通りであつた。そたから（ママ）文庫が復び二階へ移りて其の跡は彫金教場とせられた。（文庫はそれより現時の所に移つたのである）それで此當時の教授法は彫刻科の方では別に變更はなかつたが、繪畫の方にては殆んど隔月位に教室も變更し評議もマチ〳〵であつた樣である。サテ又茲に植物園時代より經師屋の銀次郎と申すものがあつて、之は根岸の經師屋山下兼吉（現時七兵衛と云）の弟子で、芳崖先生に愛せられて、學校の歴史の如きは常に能く記臆（ママ）して居つて、極めて調方（重宝）のものであつたので、學校が上野に移りてよりは、一手に引受けて仕事をしたのである。又先頃よりやめた指物師の

榎小才三と申す者も出入して居つたのである。庭園に就て申しますれば、今日の文庫の邊には花壇があつて、色々の草花が咲き亂れて居つてアノ今日動物園内に屬する南方の谷間は、あれは後に動物園に貸したので、當時は熊笹が繁茂して居つたのである。裏の方では今日にては大分擴がつて居るが、以前は今の大弓場あたりは護國院の境内であつて、今の裏門の並びは鑄金科の鑄物場の出來る爲めに後に擴げられたので、前には裏門は今のより四五間中程にあつて、垣根は今の圖書館のものゝ様な石垣土手であつた。今日裏門内に長く敷かれた飛石は、即ち之の垣根の石を用ゐたのである。サテ最後に申しますが一躰此の美術學校の前身と申すは、小石川植物園時代でありまして、之れが歴史的に申しますれば神代とも史前ともいひましやうか、此の時代には逸話奇談は中々ありまして、隨分面白き事もあります。それから愈第一期時代とも申しまするは前に略々申上げました様な創業時代で、學校組織やら、轉宅やらで、混雑ながら緒についたのであります。眞柴左金吾、加藤直景とかう突飛に申しますると、太閤記(ママ)にでもあるものゝ様でありますが、之れは此の學校の神代即ち小石川植物園時代頃よりの小使の名でありまして、何れも一騎當千の强の者で、小使部屋に於ける各一方の旗頭でありました。それから此の當時の學校の經費は、たしか一年一萬二千圓位と記臆して居ります。而して御雇教師のフエノロサ氏には、此内から年に六千圓仕拂ひましたのですから、學校の經營は、思ふ様にはされませんでした。

第七節　生徒募集、開校

募集方法

第一回生徒募集は明治二十一年十一月に実施された。左記は同年同月二十五、二十六日の『東京日日新聞』広告欄に掲載された募集広告である。

東京美術學校生徒募集

本校普通科第一年級生徒五十名（今回ハ男生徒ニ限ル）ヲ募集ス本校規則入學規程ニ照準シ入學志願ノ者ニシテ本校ニ於テ試驗ヲ受クヘキモノハ願書ニ履歴書ヲ添ヘ來ル十二月十五日ヨリ二十二マテニ差出スヘシ試驗ハ同月廿五日ヨリ之ヲ始ム

入學試驗課目

㈠讀書作文　漢字交り文
㈡算　術　全　體
㈢日本歴史　大　要
㈣臨　畫
㈤圖按若クハ彫刻模造

㈠㈡ノ課目ハ尋常中學校第二年ノ程度ニ準ス府縣特選ニ係ル者ニ就テハ此際本校ヨリ府縣廳ヘ照會シ置ケリ

東京美術學校